

俳句

大津俳句会

一隅に臘梅の香のうづくまる

井芹眞一郎

はらからの話題の尽きぬ女正月

秋山 恵子

まだ固き梅の蕾に風光る

市原 初女

初場所や鬘もきりりと若力士

大塚喜久子

帰郷して年越の蕎麦いただきぬ

坂本 セキ

それぞれの新年の顔同窓会

佐賀 久子

カルデラに静かな燈冬の月

松尾 昭雅

太極拳三味線草に囃さるる

渡邊佳代子

探梅の一步踏み出す日和かな

岡崎 浩子

一頻り梅の香りに包まれし

森山美穂子

俳句

つのはな句会

中年や牡蠣喰うハーモニカの音階で

星永 文夫

寒菊や忽然と鳴る古時計

榮田しのぶ

初御空ひしやげた未来膨らます

志賀 孝子

一刀彫の鼠が二匹こぞ ことし去年今年

田上 公代

筆太の子の文字躍る四方よもの春

木庭 杏子

初空に記すこころの処方箋

上杉 波

紙ヒコキ故郷を乗せ初夢に

矢嶋 道子

臘梅ろうばいの幸多かれと灯を点す

水野 春子

冬苺買う路地の先より福が来る

梅木トキエ

初電車スマホの人らと夜の静寂しじま

塚本 洋子

短歌

大津短歌会

臘梅のまろき蕾はほどけつつ

匂いかそけく母の俣ばる

吉永 恵子

静かなるダムに佇み見渡せば

湖面彩る山の紅葉

豊岡ミツル

忽然とわが師旅立つ秋日和

呼び鈴のみがむなく響く

鞍 岳志

無様なる姿晒して終るなど

洪水の後の流木にしても

渡邊佐代子

ゴールかと八十路もはるか日々であり

合わせ鏡に幸写しおり

管野 静

落葉し秋深かまれるこの夕べ

味の沁みたる大根を食む

小平 善行